

岡武
藤禎
雅夫
彦編

嘶本大系

第二卷

東京堂出版刊

編者略歴

武藤禎夫 大正十五年、東京に生まれる。東京大学国史学科卒業。現在、朝日新聞社日本古典全書編集長。編著に『江戸小咄辞典』『落語三百題』『江戸小咄の比較研究』（東京堂出版）『中国笑話選』『昨日は今日の物語』（平凡社東洋文庫）『日本小咄集成』（共編、筑摩書房）など。
岡雅彦 昭和十五年、北海道に生まれる。昭和四十年北海道大学大学院文学研究科修士課程終了。昭和四十三年フェリス女学院大学講師。昭和四十八年国文学研究資料館助教授。著書に『近世文学資料類従・九、案内者・世談問答』（勉誠社）など。



漸本大系 第二巻

定価は箱に表示
してあります

昭和五一年二月一五日 初版印刷
昭和五一年二月二五日 初版発行

編者 武藤 禎夫
岡 雅彦

発行者 岩出 貞夫

印刷所 理想社印刷所

製本所 協和製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三十五(〒100)
電話 東京 三九一八三六 振替 東京 二七〇

凡 例

本大系は主として江戸時代前期（明和年間まで）の所謂軽口本の代表的な作品を収録するものであるが、初期のものとしては、狂歌咄風の作品も収録した。

翻刻にあたっては、底本の忠実な活字化につとめると同時に、読み易いものとするように努力した。その方針は概ね次の通りである。

- 1 本文の行移り・丁移りは底本に従わなかった。ただし、底本の各丁の終りに当る所に、版心の丁付により丁数を括弧内に漢数字で示した。例えば一丁の表と裏は（一オ）、（一ウ）で示し、挿絵がつづく場合は（一ウ）（二オ挿絵）、（二オ）（二ウ・三オ挿絵）などとした。底本に丁付を欠くときは洋数字で実丁数を記した。
- 2 句読点は底本にとらわれず、私見によって句読点・並列点を施した。
- 3 小文字の割り書等は意味のある場合にのみ再現し、咄の末尾の評語も本文と区別するために小文字にした場合もある。歌句は改行して理解の便を図った。
- 4 仮名。

イ 仮名の字体は現行の平仮名・片仮名に統一した。ただし、当時平仮名の意識で使用されていた「ミ」「ハ」「ニ」は読み易さを考え、そのまま残した。

ロ 特殊な合字・連字は現行の字体に改めた。（例、フーコト、メーシテ、ガより、馬さま）

ハ 仮名遣は混乱しているが、底本通りとして、歴史的仮名遣には改めなかった。

ニ 本文の清濁は、底本では当然濁点のあるべき所に、ない場合が多いが、私に加えることはせず、底本通りとした。ただし、濁点の位置のずれは正した。(例、おとがし↓おどかし)

ホ 誤字・誤記と思われる仮名も改めず、行間に(ママ)と注記するか、或は正しいと思われるものを()で囲んで示すかした。

ヘ 衍字と考えられるものも削らず、(ママ)(衍)の注記をした。

ト 振り仮名も底本通りとし、削除したり補ったりはしなかった。「限り」などの衍字もそのままとした。ただし、位置のずれは正した。(例、奈良↓奈良^{なほ})

5 漢字。

イ 字体は原則として新字体を用い、新字体のないものは通行の旧字体を用いた。ただし、固有名詞などで底本のままにした場合がある。

ロ 異体字はできる限り、新字体或は通行の旧字体に改めた(例、忝↓松、焜↓喜、焮↓秋)。しかし、該当する字のない場合(例、姚、泪、嬭)は、そのまま残した。

ハ 宛字及び通行の久しい慣用文字は注記せずに残した(例、百姓↓百姓、陳所↓陣所、有時↓或時)。ただし、極端なものは(ママ)の注記或は正しい字を()内に示した。

ニ 特殊な草体・略体は通行の文字に改めた。(例、ぬ↓候、ま↓也、ヒ↓被、や↓給、ア↓部、井↓菩薩、厂↓鴈、广↓磨)

ホ 誤字・誤刻はそのままとし、注記を施した。

6 反復記号は底本にしたがい、「ム」「ミ」「ム」「ミ」の四種を使用した。

7 挿画はすべて収録した。その位置は該当する咄の中か、近い場所に挿入した。後人のいたずらがきなどは消したが、他は修整しなかった。

8 校訂者の注は最少限にとどめ、行間に（ ）を以って示した。

9 虫損・汚損等による難読箇所は、他の同一版本で校訂した場合は特に注記はしないが、異版等でその文字を推定しうる場合には、（○○カ）と注記した。校訂出来なかったものは、空白のままとした。

10 語の詞章に付したゴマ点や話の番号の罫みなどは削除した。文中に記された特殊な図柄は凸版で示した。

11 題名のない場合、検索の便を考え、各話の冒頭に、それぞれ通し番号を洋数字で付した。

12 諸本や後刷本との話の異同出入などで特記を要するものは、補遺の形で、該書の末尾または解題中に付加した場合がある。

底本に用いた原本は、容易に閲覧できる利便を考慮して、公共の図書館・文庫や大学の研究室・図書館所蔵のものを主として使用したが、一部は架蔵本に依った。出来る限り初版完本を心がけたが、元版を求め得ず、その板木を用いた改題後刷本の方を紹介したものもある。また一部を欠いて不完全のため、他蔵書と合わせて揃えたものもある。その場合には注記を施した。

各巻末には、所収書の解題を付した。そこでは簡単な書誌と、諸本や後刷本との関係や異同などに触れた。

第一冊～第四冊を岡が、第五冊～第八冊は武藤が、主として担当した。

底本の所在は一々記したが、公刊を許可された図書館・研究室は次の通りである。記して謝意を表する。

東北大学図書館・水戸彰考館・国立国会図書館・都立中央図書館・宮内庁書陵部・東洋文庫・東京大学図書館
・同霏亭文庫・同国語研究室・早稲田大学図書館・学習院大学図書館・大東急記念文庫・刈谷市立図書館・蓬
左文庫・京都大学文学部図書室・大阪府立図書館・天理図書館・広島市立中央図書館

目次

凡例 三

醒睡笑（元和九年序）

卷之一 四

卷之二 三四

卷之三 五

卷之四 六

卷之五 一〇三

卷之六 一三

卷之七 一六

卷之八 一八四

理屈物語（寛文七年刊）

卷之一 二四

卷之二 三七

卷之三 三九

目次

卷之四.....二五〇

卷之五.....二六一

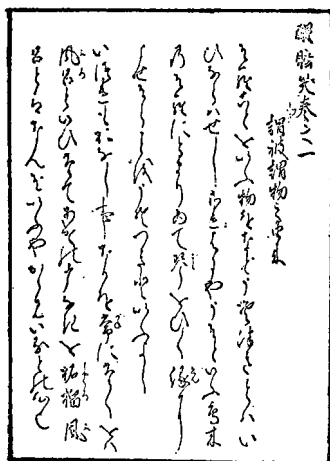
卷之六.....二七〇

所収書目解題 二六一

嘶
本
大
系

第二卷

醒睡笑



ころはいつ、元和九癸亥の稔、天下泰平人民豊楽の折から、策伝某小僧の時より、耳にふれておもしろくおかしかりつる事を、反故の端にとめ置たり。是年七十にて、誓願寺乾のすみに隠居し、安楽庵といふ。柴の扉の明暮、心をやすむるひま／＼、こしかたしるせし筆の跡をミレハ、をのつから睡をさましてわらふ。さるまゝにや、是を醒睡笑と名付、かたはらいたき草紙を、八巻となし（一オ）て残すのミ。（一ウ）

元和九年序
安楽庵策伝著
大本八卷八冊
東大南藝文庫蔵

醒睡笑卷之一目録

謂被謂物之由来

落書

ふはとのる

鈍副子

無智之僧

祝過るもいな物(2才)

醒睡笑卷之一

謂被謂物之由来

- 1 そらことをいふ物を、などうそつきとはいひならハせし。されはにや、うそといふ鳥、木のそらにとまりゐて琴をひく縁によせ、そらことをうそつきといふよし。
- 2 いつれもおなし事なるを、常にたくをハ風呂といひ、たてあけの戸なきを柘榴風呂とは、なんぞいふや。かゝみいるとの心也。(3才)「1」
- 3 かいさうの類にお期といふ藻あり。かのおごもよく食をすゝむる功能あり。さてぞ武家の台所に、飯をはからひもり、人にすゝむる役者をおごとはいふならし。
- 4 よろつ物のむさき事をきたないといふかに。北は水の方なり。水なければ万物きよからす。しかるあひた、水なといふになそらへ、きたないといふかや。
- 5 宗祇宗長とつれたち、浦の夕に立出あそ(3才)はれしに、漁人のあみに藻を引上たり。是はなにと名をいふぞととハれたれハ、めとも申、も共申とこたふ。時に祇公、や

れ、是ハよい前句やとて、

めともいふなりともいふなり

宗長に、つけられよとありければ、

引つれて野^のかひのうしの帰るさに

妻牛^{めう}ハうんめとなき、男牛^おハうんもとなくなる。祇公^{きこう}感^{かん}せられたり。宗長の、一句沙汰^{さた}あれと所望^{しやう}にて、(4オ)

よむいろはをしゆる指のしたをみよ

ゆの下ハめなり、ひの下ハもなり。

6 随八百とハなにをいふ。聶^ねかしうとのもとに行、いんきんに一札ありて後、しうとのいふやう、今までハ公界^{こうかい}むきよし、此後ハ随をいだひてあそべれ候へと。聶^ねきゝて肝^{の脱力}

をつぶし、京へ俄に随をかひにのほする。高声に随をかハんとよぶ。利口なる者行合、亀の子をいきずい是なりとて、

八百にうりたり。聶^ねよろこひ座^{4ウ}敷へ持て出、随を出しまいらするとて、あゆませたり。それより随八百とはいふと。おかしや。(2)

7 餅をかちんとは、かちんのでぬくひにて、かミをつゝミゆふたる女房の、いつも禁中へもちをうりに参りつけたり。もちうりとあれハ、こと葉のさまいやし。いつものか

ちんかまいりたるなと沙汰あれハよろし。

8 餅^(マ)のちとなかきやうなるを、しんかうといふ事、あかき小豆をうへにきする、あかつきと(5オ)いふゑんにていふとなり。

9 河内の国に珍^{ちん}といふあり。大和に場^ばといふあり。二人なから兵法^{ひやうぽう}の上手^{じやうず}なりしか、有時しあひせし。双方^{さうほう}片足^{ぺあし}をおとしおとされ、すてに死にのそむ時、金瘡^{きんさう}の上手とて来る。あまりあへてふためき、其ぬし／＼の足をバとりちかへ、我が人を、人のを我がにつきかへたり。さるまゝ、一人は足ななくなり、一人ハ足みしくなくなり、腰をひきしより、今もかゝるありきの人を、ちん(5ウ)とはいふよし。

10 いそがバまハれといふことは、物ことにあるへき遠慮也。宗長のよめる、

武士のやはせのふね^{わたらい}はやくとも

いそかはまはれせたのなかはし(3)

11 和州より出るほてんといふ瓜ハ、延暦寺伝教の弟子慈覚大師、天長十年四十にて身つかれ眼くらし。命久しかるましき事をおもひわきまへ、叡山の北谷に草庵を(6オ)むすひ、三年つとめ行じておハりをまたれけれハ、ある夜、

夢に天人来りたり。これ靈藥也とてあたふ。そのかたち瓜ににたり。半片を食す。その味蜜のことし。人ありてつくるやう、これほんてんわうの妙藥なりと。夢さめて口中に余味あり。しかうして後、やせたるかたち更にすくやかにくらきまなします／＼あきらかなり。その半片を土にまきければ、まつたき瓜の生せし。いまの梵天これなり。(6ウ)元享釈書に見えたり。

12 瓜の糟^{かす}つけを奈良つけといふ事ハ、かすかのあれはよいといふあむなり。

13 何事も油断^{ゆたん}の様に取合^{とりあひ}のをそきを、ぬかるといふなる。俊成卿の哥に、

せき入る苗代水やこほるらん

ぬかりて道のかはくまもなし

14 なに／＼も水に入たる物を、湯いりとへなにしにいふぞや。沖^きなかでそこねたとの(7オ)ゑんにや。

15 こぼれさいはひとはなにをいふ。昔女子三人一つ枕にいねたりし。姉夢見るやうハ、我が身の上へ富士の山がころびかゝると見たとかたれば、人ありてあはせける、それこそとみたるおのこをもたんずる告夢^{こぐむ}なりといはひければ、

次のむすめいふ、あれほど大なる富士の山が、姉^{あね}こひとり
の身の上ばかりへハころぶまし、両方^{りやうほう}にねたる者の上へも
かゝりこそせめと、う(7ウ)れしけにいたりしが、はた
して三人なから、目度富貴の男をえたりし。これよりこ
のことはありとなむ。

16 物を無用といふ詞のかはりに、よしにせよといふは、
あし垣^{かき}も戸さしもよしやすするかなる

清見かせきハ三ほの松バラ

此哥にて心得ぬへし。三保^{まほ}の松原の面白景^{おもしろき}を詠るハ、関
にをよはす、えゆくまいほとに(8オ)清見か関はよしにせ
よとよめり。〔4〕

17 瘦法師^{うせふし}の酔^すこのミとは、やせの寺ハ昔より禁酒^{きんしゅ}にて、
酒をいれず。僧の中に酒をこのミ、えこらへぬあり。常に
土工^{とくり}季をもちて行かよふ。若人^{もじ}とふ事あれハ、すにて候と
いふ。日を経すかよひしげし。又とふ時も同返事なるまゝ、
諺^{ことわざ}にいひならハし、やせの法師ハすごのミや。

18 なべて上臈^{じやうらふ}かたには、さゝぢんといふを、禁中^{きんちゆう}には、
まちがねとかやもてあつかひ給ふ事、こ(8ウ)ぬかといふ
ことはのえんにや。〔5〕

19 わらんへは風の子と、しるしらす、世にいふは何事ぞ。
ふうふのあひたのなれば也。〔6〕

20 山城の国伏見のつぶきに、法性寺といふ在所あり。

人此処をハ何とて寺の名をよふそや。老たる男出合、さる
事候、昔此地に庄屋有、かれやき米をすいて食、終日かミ
くたびれ、ほうにふくミなからねいたり、鼠にほひにた
より、くひやぶり、大に口をあけけり、其朝地（9オ）下の
者どもとふらひくる中に、金瘡の上手あり、風を引てハあ
しかりなむと、先障子を折て疵の口にたてしより、ほう
しやうじとハいふ也。

21 昌叱のもとへ、やき米を三ふくろをくりければ、

いちはやきこめらうとものなすわさを

おく齒に入てかミふくろかな

又はいかに、

まはるたひにそこめをみせける

さしてなぎとがするうすに縄つけて（9ウ）

22 鬼に瘰をとられたといふ事なんぞ。目の上に大なるこ
ぶをもちたる禪門ありき。修行に出しか、有山中行暮て
宿なし。古辻堂にとまれり。夜すでに三更にをよふ。人

音数多して、かのだうに來り酒ゑんをなす。禪門おそろし

くおもひながら、せんかたなけれハ、心うきたるかほし、
円座を尻につけ、たちておとれり。明かたになり、天狗と
もかへらんとする時いふ、禪門うき蔵主にてよき伽也、今
度もかならず（10オ）きたれと。やくそくはかりハいつはり
あらん、たゞしちにしくはあらしとて、目の上のこふを取
てそ行ける。禪門たからをまうけたる心地し、故郷に帰る。
見る人かんじ、親類歡喜する事はかりなし。

23 あさ謡はうたハぬ事とも、又朝うたハびんぼうの相
ともいひ伝へたり。ミナ僻事也。本説は、麻をまく時うた
ひをうたふなといましむる。其故ハ麻はふしをきらふほど
に。（10ウ）

24 へちまの皮ともおもハぬとハ、紀の国の山家に、大へ
ち小へちとて、峯たかふ岸けハしく、つゝらおりなるつた
ひ道、人馬の往来たやすからぬ切所あり。彼あたりにつか
ふ馬ハ、糠につけ糞につけ、大豆なとハ申にをよハねは、
実に骨計なる様なり。さるほとに、かしこの馬、皮を剥て
も、せのあと瘡の跡、疵のミにて、何のやくにもたゞぬ物
を、へち馬の皮ともおもハぬ事にいふならん。（11オ）

25 世間に下手なる者を鯺うづとくらひと云事ハ、けしからずうどんをすく者あり。さすがかうてハくいともなし。利口になき坊主にむかひ、そなたわが髪かみをそりてたび候へ、もしきられ候ハ、鯺うづをふるまはれよ、難なくそられたらバ我ふるまはんと、いひあはせ、そらるゝに、はやきらずにそりはてんとするつがい、ふとたち、少きられんとしてけれハ、耳を一つおとされたり。腹をバたゝて結句けつこよろこひぬるは、めつらしきうつけなるかな。(11ウ)

26 七歩しちほとぬるゝとハ何事そ。されハ尺迦誕生たにじやうの時、阿難あなん陀竜王たうりやうハ湯ゆを吐はき、難陀竜王なんたうりやうハ水を吐はき、此うぶ湯にぬれながら、七歩を行せられしより起りたることばそかし。浄土の無量寿経に、從右脇生現行七歩じやうけうしやうげんぎやうしちほといへり。しとゝぬるゝも七歩と也。

27 鶉うずのまねする鳥は大水をのむとハなんぞ。

水に入ミちをハしらて山からす

鶉うずのまねまなふ浪なみのうへかな

28 豆腐とうふを串にさして焙あぶるを、なと田楽でんがくとハいふ。(12オ)

されば田楽でんがくのすがた、下には白袴はくまをき、其上に色ある物をうちかけ、驚足さきあしにのり、おとるすかた、豆腐とうふの白に味噌みそを

ぬりたてたるハ、かのまふていに似たるゆへ、田楽といふにや。夢庵むあんの哥かに、

たかあしをふミそこなへるめんぼくを

はひにまぶせる冬ふゆのでんかく

29 僧そうの米こめをもちよりて食するを、打飯たふんとハいかでいふ。

たとハだしあへせたる心なり。八人の妒打あつたす話わ、火の字の分字なり。(12ウ)

30 ある人、北野に籠かごて本地を祈いのければ、

かくらくのはつせのてらのほとけこそ

きたのゝ神とあらはれにけれ

31 鯛いしをハ上臈じやうらうかたのことばに、むらさきとてはやさるゝ。むらさきの色ハあひにハましたといふえんとや。され

ハ下主らしきいしも、其人のすきなれハ鮎あしの魚にもまさるよのふ。

32 理りをハ非ひになし、非ひをハ理りになし、顔をあかめ、興きようを

さまし、むさと物ことによこさまにわめく者(13オ)を、なべて世の人、あれハいかいどろふミよといふ事、ハだしじやとのえんごなり。雄長老、

春雨の風にしたかふかいたうハ